

まなびや

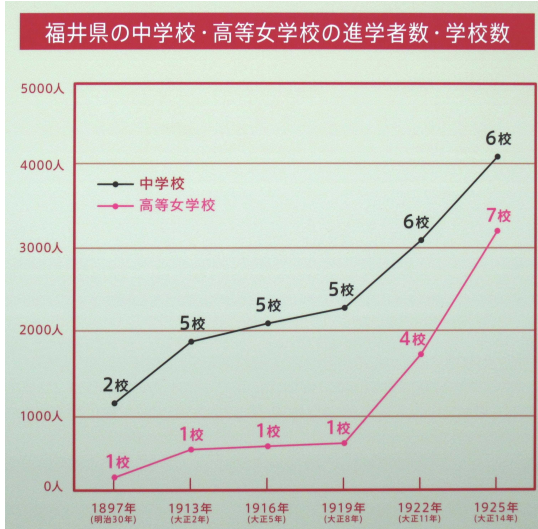
福井の女子教育

女子教育の発展とともに

一八七二（明治5）年、学制発布により新しい教育制度がスタートしました。明治20年約4割だった就学率は、制度整備が進み25年には9割になりました。

県内では裁縫科の設置や、子守をしながら授業を受けられるなど女子の就学者の増加に努めました。

明治末から中学校・高等女



女性に不要とされた学問を修め、教育に携わる、新しい女性の職場が確立されたのでした。

一九二八（昭和3）年福井師範学校の女子部が分離して、鯖江女子師範学校

学校などへの進学志向も高まり、大正期には学校数・生徒数は大きく増加しました。

女性の教員養成の制度はまだ整っておらず、明治5年には福井県内の女性教員は4人だけでした。その後、師範学校などの設置があり明治44年には県内の約3割まで女性教員は増加しました。当時の女性教員の資格・待遇は、男性よりもはるかに低いものでしたが、かつて女性に不要とされた学問を修め、教育に携わる、新しい女性の職場が確立されたのでした。



鯖江女子師範学校農業実習(昭和8年)

石田縞の制服を着た女子学生大正期(丹生美科高等女子校)が新設されました。

当時授業で使った社会変遷双六図を見ると、女子師範生に対する期待が見えてきます。卒業し教員としてだけでなく、地域社会、家庭だけでなく、国際社会に至るまでの広い世界での活躍が女子師範生に期待されていたことが読み取れます。師範学校で学ぶ高学歴の女性であることを自負して生きてほしいという願いも込められていたのかも知れません。



▼禿すみ(一八七六(M9)～一九五〇(S25)年)

幼い頃から学問を好み、女子に学問は必要ないという考え方が一般的な時代に髪を切



わたし、先生になる！

鯖江女子師範学校での学び

秋の特別展 開催中 12月12日まで

とく・すみ 鯖江市出身

つて学問への強い決意を示し、同志社女子部まで進学しました。

外国を視察した父の話から女子教育の必要性を感じたすみは、父が設立した日本道徳会婦人部を設け、婦人仁愛会教園を設立します。一九二四(大正13)年、仁愛女学校が高等女学校に昇格すると校長に就任し、女子教育の発展に尽くしました。



鯖江女師生を中心とする社会変遷双六図…一九三一(昭和6)年頃